

J. D. O'Connor and G. F.
Arnold :
*Intonation of Colloquial
English*, 2nd ed.

松坂 ヒロシ

英語のかぶせ音素は、英語の諸相のうち、
体系化が比較的困難なもののひとつであろう。
まして、英語を外国語として教える場合にか
ぶせ音素をいかに扱うべきかという問題は、
正確さを求める言語記述上の考慮と、煩雑さ

をきらう教授上の考慮との兼ね合いの問題であり、どちらの要請にもある程度こたえるような点を見出すことは、容易でない。

前書きに明記されているとおり、著者が設定した本書の主たる読者は、英語を学ぶ外国人学習者である。本書は、抑揚に関して新しい言語事実を発見することはめざしておらず、むしろ、すでに観察されている事実を分析、分類し、抑揚の役割や用法をまとめている。この分析のしかたが、前述したふたつの立場からの要請をいかに満たしているかを、見ていきたい。また、1961年に発行された初版⁽¹⁾との比較においても、検討しよう。

本書は、英語の抑揚を7個の tunes に分析する。すなわち、Low Fall, High Fall, Rise-Fall, Low Rise, High Rise, Fall-Rise, それに Mid-Level である。初版には、はじめの6個しか挙げられていない。声は、Low Fall においては、声域の中程から非常に低い pitch まで下がる。High Fall においては、高い pitch から非常に低い pitch まで下がる。Rise-Fall においては、かなり低い pitch から高い pitch まで上がり、次に非常に低い pitch まで下がる。Low Rise においては、低い pitch から中程またはそれよりも少し上まで上がる。High Rise においては、中程から高い pitch まで上がる。Fall-Rise においては、かなり高い pitch からやや低い pitch まで下がり、次に中程まで上がる。Mid-Level においては、声は上下せず、高低の間の pitch を維持する。

この分析に関して、2点コメントしたい。まず、はじめの2個の tunes についてである。この間に存在する差は程度の差であり、弁別的なものではない。したがって、Low Fall にも High Fall にも解釈できる抑揚はいくらでも存在し得る。この点から考えると、2個の tunes をそれぞれ独立の tune として提示し、それらの差があたかも、たとえば

High Fall と High Rise との間の差などと性格的に同じであるかのような印象を与えることには問題がある⁽²⁾。もっとも、かぶせ音素を使った感情表現は外国人学習者には体得しにくいことであるから、教授法の点からは、2個の tunes の設定には意義が認められる。

次に、第2版にはじめて登場する Mid-Level についてである。この tune には2種類の用法がある。ひとつは、発話が未完結であることを示す用法、いまひとつは、いくつかの慣用的な表現に歌うような調子を与える用法である。前者の用法における Mid-Level は、独立した tune としての地位が与えられるべきか、疑わしい。なぜならば、この場合の Mid-Level は、用法の点から言っても、物理的な特徴から言っても、ある tune の head の中の stressed syllable と異なるところがないからである。後者の用法における Mid-Level のみを独立した tune と見なすほうが、妥当のようである。

著者は、tunes に続いて4個の heads を挙げる。head とは、nucleus の前の最初の accented word の中の、stressed syllable から、nucleus の直前の音節までの部分のことである。emphasis のない抑揚に現われる head には、Low, High, Falling, それに Rising の4種類がある。emphatic な抑揚には、これら4種類に加えて、Stepping, Sliding, それに Clumbing の3種類が使われる。High Head の stressed syllables を下り坂に並べ、unstressed syllables を、その前に現われる stressed syllable と同じ高さにすると、Stepping Head が得られる。Falling Head の、それぞれの stressed syllable のあとの unstressed syllables の列が、そのあとに現われる stressed syllable より低く終わるようにすると、Sliding Head が得られる。Rising Head の、それぞれの stressed syllable のあとの unstressed syllables の列

が、そのあとに現われる stressed syllable より高く終わるようにすると、Climbing Head が得られる。

初版では、emphatic と unemphatic との区別が行なわれておらず、head の種類として、Low, Stepping, それに Sliding のみが挙げられていた。上段にまとめた、第2版の head の分析は、記述の正確さと、学習者にとってのわかりやすさとの両方の点から考えて、初版のそれよりも妥当性が高い。発話の中の個々の要素の強調である accent なる概念のほかに、発話全体を強調する emphasis なる概念を設定することは、かぶせ音素の考察には重要である。

pre-head としては、Low と High との2種類が挙げられている。head が Low 以外のものである場合、Low Pre-head は stressed syllable を含むことがある。head が High 以外のものである場合、High Pre-head は stressed syllable を含むことがある。本書には、ascending pre-head と descending pre-head とは扱われていない。このふたつのカテゴリーを節約し、pre-head の種類を Low と High のみにしたことは、得策であっただろうか。あとで、nucleus の分類との関係で考えよう。

さて、著者は、前述の tunes, heads, pre-heads をもとにして、次に挙げる 10 個の tone groups(unemphatic) を設定する。カッコ内の要素は optional である。Low Drop: (Low Pre-head+) (High Head+) Low Fall; High Drop: (Low Pre-head+) (High Head+) High Fall, Take-Off: (Low Pre-head+) (Low Head+) Low Rise, Low Bounce: (Low Pre-head+) High Head+ Low Rise 又は High Pre-head+Low Rise; Switchback: (Low Pre-head+) (Falling Head+) Fall-Rise; Long Jump: (Low Pre-head+) Rising Head+High Fall; High

Bounce: (Low Pre-head+) (High Head+) High Rise; Jackknife: (Low Pre-head+) (High Head+) Rise-Fall; High Dive: (Low Pre-head+) (High Head+) High Fall+ (Low Accents+) Low Rise; Terrace: (Low Pre-head+) (High Head+) Mid-Level.

この分類を見ると、次のことに気付く。すなわち、ある抑揚曲線がどの tone group に属するかは、ほとんどの場合、その曲線の nucleus によって決定される、という点である。そうでない場合は、High Drop と Long Jump とに見出せるのみである。どちらの nucleus も High Fall であるから、nucleus を見ただけでは識別できない。これほど nucleus のかたちと tone group との間に深い関係があるのなら、分類のシステムをもっと簡単にできないだろうか、という疑問がわく。Kingdon など、多くの抑揚分析の著作の中で行なわれているように、nucleus を抑揚曲線の分類の最も重要な規準とするならば、正確さをそこなわずに、記述を明快なものにできるのではない⁽³⁾か。High Drop と Long Jump との差については、同じ tune に属しながら異なった head を持つふたつの曲線の差として提示することが可能である。

また、nucleus の設定のしかたそのものに疑問がわくような tone group がある。それは、High Dive である。曲線のかたちから言っても、発話にこめられる感情から言っても、これは、Take-Off の emphatic なものと考えるべきではないだろうか。むしろ、本書によれば、High Dive に現われる High Fall と、Take-Off の High Pre-head とは異なる。しかし、High Dive を descending pre-head のついた Take-Off と考えれば、説明がつく。しかも、descending pre-head を設定することは、問題の曲線以外の曲線の記述をも正確にする。本書は、発話のうち、accent のない部分に属する pre-head にも、

stress の存在を許容する。この考え方に従えば, High Dive の High Fall がになっている stress は, descending pre-head の中の stress と解釈できる。

pre-head の中にも stress があり得る, とする本書の理論は, 妥当である。発話全体に emphasis を置く場合, 話し手は, しばしば, accent のない要素の stressed syllable にも stress を置くからである。⁽⁴⁾

本書は, 発話を, statement, wh-question, yes-no question, command, interjection に分類し, それぞれの tone group に対して, これらの発話の種類ごとの感情の説明を加えている。また, 抑揚練習のための豊富な例文について verbal context を示し, 例文の多くには, その文に続き得る発話も示している。こうした配慮により, 本書は, 抑揚とそれが伝える感情との関係を解説することに, かなり成功している。

本書の抑揚分析は, かならずしもシステムとしてまとまってはいない。むしろ, 多くの tone groups を設定してそれらを並列に挙げた, という印象を与える。それは, 本書を, 理論書ではなく, 学習者のための実用書としよう, という意図が著者にあるためであろう。著者のこうした意図は, 相当, 達成されている。研究者にとっては, 分析のシステムにこそ検討の余地があるかも知れないが, 考察の具体的材料を提供してくれる, よき資料となろう。

J. D. O'Connor and G. F. Arnold,
Intonation of Colloquial English, 2nd
ed., Longman Group Ltd., 1973

注

1. J. D. O'Connor and G. F. Arnold, *Intonation of Colloquial English*, 1st ed. (London: Longmans, 1961; rpt. Tokyo: Maruzen, 1964).

2. 連続的变化をする抑揚曲線については, D. L. Bolinger, "Intonation and Analysis," *Word*, Vol. 5, No 3 (1949) や, Bolinger, *Generality, Gradience, and the All-or-None*, *Janua Linguarum*, No 14 (The Hague: Mouton & Co., 1961) に考察されている。

3. Roger Kingdon, *The Groundwork of English Intonation* (London: Longmans, 1958).

4. Bolinger, *Generality*, p. 39.